塗師（ぬし）の歳時記　第二回　椀の魂

文　赤木明登

雪が解けるやいなや若草が地表を覆い、やがて長けて夏草となる。

田舎に暮らすと、その執拗さとしたたかさを、季節ごとに思いしらされる。油断する間もなく、夏草は自然の先鋒となって、わが領土つまり人工の領域を侵し始める。田んぼも畑も家屋も、ひ弱な人力で雑草どもと闘い抜くことによってようやく維持されている。人の住まなくなった土地は、瞬く間に草木によって侵食され、すべての人工物は自然という混沌にのみ込まれていく。こうして森林と隣り合わせの草屋で、自らの運命と向かい合わざるを得なかったのが、日本人本来の姿ではなかったろうか。少なくとも、近代化以前に人間が手で作り出したものを眺めるとき、その感覚を甦らせておくことが、古物と親しくするための要諦となる。

今から二十五年前の夏、僕は奥能登の名も知れぬ廃村にいた。輪島塗を修業する合間の気晴らしに、山中を歩いていたのだ。間口九間、奥行六間、うずくまる茅葺屋根。豪壮な古民家に樹木が絡みつき、いままさに森にのみ込まれようとしていた。引き込まれるように足を踏み入れると、すでに床は落ちて畳は朽ち、家財のほぼすべては土に還っている。眩さに仰ぎ見ると、草屋根も崩れ太い梁の間から陽光が射し込んで内部の湿った地表を照らしている。光の届く先に何やら赤いものがちらりと見えた。近づくと、一片を露出させて黒い土に埋もれているのは古椀だった。掘り起こして土を払うと、おそらく幕末期の輪島塗。朱塗りの飯椀である。この椀との出会いを必然として、家に持ち帰り、ともにながらく過ごすこととなった。

工房で仕事をするとき、目の届く場所にこの椀が必ずある。肩幅に両足を広げて、大地を踏みしめ、しっかりと真っ直ぐに立つ高台。そんな土台が支えているのは、内側に掌の丸み、外側に乳房の膨らみ。人が自然から糧を得て生きていくことの喜びと感謝と祈りがそのまま形となっている。しかし、明確な意志を持ち、混沌からきりりと切りとられた輪郭は、領域を侵してしまったものの宿命と向き合っている。そうなのだ、実は自然が人工を侵すのではない。自然は一方的に奪われた領域を、本来天然の力で「快復」させようとしているにすぎない。人間は、その力に抗いつづけながら、やがてのみ込まれていくしかない。自然を加工し、ものを作るということは、そういうことなのだと、古椀が教えてくれる。

二十年前に修業を終え独立したとき、最初に作ろうと思った、いや、そうせざるを得なかったのが、この椀の魂を写すことであった。

赤木明登作「飯椀」
輪島紙衣塗、素材：欅、漆、和紙、輪島地粉、綿布
高さ8cm（口径12.8cm）
右ページ2点のうち奥の椀が拾った古椀。

あかぎ　あきと｜1962年岡山県生まれ。輪島塗の下地職人・岡本進のもとで修業、94年に独立。97年、ドイツ国立美術館「日本の現代塗り物十二人」、2000年、東京国立近代美術館「うつわをみる 暮らしに息づく工芸」展に選ばれる。最新刊『名前のない道』が6月22日、新潮社より刊行。www.nurimono.net/

写真 雨宮秀也